

高卒無業者とジェンダー

大道真佐美 (お茶の水女子大学大学院)

1. はじめに

90年代以降、高校卒業後に進学も就職もしない「無業者」(文部科学省『学校基本調査』による。98年より「左記以外の者」と改称)が漸増している。最新のデータによれば、2001年3月に全国で9.8%(13万人)に昇っている。無業者率は地域によって格差があるが、この高卒無業者問題は学校から職業あるいは進学へのスムーズな移行の崩れとして問題視され、近年研究が行われつつある(荻谷ほか 1997、粒来 1997、耳塚ほか 2000、日本労働研究機構 2000など)。

これまでの無業者研究からは、大都市の進路多様校を中心に無業者が輩出されていることが明らかになっている(耳塚ほか 2000)。そして無業者が生み出される背景には、就職との関連では労働力需要側の変化によって未就職者が増加していること、進学との関連では家庭の経済的要因によって進学困難な者が増加していることなどが挙げられている(日本労働研究機構 2000)。さらに、普通科進路多様校では、まん中ぐらいの成績の者に進路選択が遅延しているが、職業科に比べて適切な進路指導が行われなため無業者になっていくという普通科に特徴的なプロセスがあることも描かれている(粒来 1997)。

このように、高卒無業者になっていく背景にはいくつかの要因が挙げられるが、性別による差異についても徐々に関心が持たれている。小杉(2001)は、高卒無業者の中にフリーターと呼ばれる非正規雇用者が含まれていることを取り上げ、その属性をまとめている。それによると、①2000年では15~34歳のパート・アルバイト就業者数は男性83万人、女性(無配偶)110万人と女性が全体の約6割を占めている。また24歳以下の非正規雇用比率は男性20%、女性26%であるなど女性のほうが多い ②20代前半までが多いが、次第に20代後半以降のものが増えている ③学歴は高卒のものが過半数 ④首都圏、関西圏に集中している、となっている。2001年3月卒の高卒者においても、全国の高卒無業者は男子9.0%(6万人)、女子10.6%(7万人)とやはり女子に多い。では、無業者という進路には、どのようにして性による偏りが出てくるのだろうか。

従来、進路分化研究では、学校ランクや成績が生徒の進路志望を内面化させ、自分にふさわしい進路にふりわけられていくというメリトクラティックなメカニズムに注目してきた。しかし家庭や学校では、子どもが男子であるか女子であるかによって、進路や将来に異なった期待を持っていること(たとえば、「男子は四大、女子は短大」「男子は職業を持ち、女子は結婚して一人前」など)が多い。特に女子の進路選択研究からは、学校や家庭での性役割観が重要な意味を持っており、それによって女子が職業志向を持つか、母・妻役割を志向するかに分かれていくこと(中西 1993など)が明らかになった。つまり、進路選択にジェンダーという非メリトクラティックな要因が関与しているのである。したがって無業者という進路に男女で偏りが生じている背景には、こうしたジェンダーの要因が関わっていることも十分考えられる。

これまでの無業者研究では、無業者の多くが輩出されている進路多様校に注目し、そのメカニズムを解明し始めているが、ジェンダーの観点からの研究はまだあまり行われていないのが現状である。そこで本稿は、進路多様校といわれる都立高校の生徒を対象とした調査から、無業者という進路にどのようにして性の偏りが出てくるのかについて分析をおこなう。

2. 実証研究の対象と方法

本発表で用いるデータは「高卒無業者研究会」(耳塚寛明(主査)・小杉礼子・佐藤(粒来)香・長須正明・大道真佐美・堀有喜衣・諸田裕子)が行なった高校3年生対象の質問紙調査を基にしている。

対象:東京都に所在する高等学校17校に在学する高校3年生。調査対象校は相対的に無業者を多く出しているいわゆる進路多様校。地域的なバランスと学科を考慮して対象校を選定し、調査をご承諾頂いた17都立高校の3年生2131名に対して行われた。普通科11校、専門学科6校。

調査時期:2001年1月

調査方法:質問紙による集団自計式調査

調査内容:校内・校外生活の過ごし方および予定進路

回収票の構成:性別<男子 905名 女子 1167

名 無回答 59 名> 学科別<普通科 1297 名
農薬科 180 名 工業科 165 名 商業科 489 名>

3. 分析結果

3-1. 男女の卒業後の進路予定

まず卒業後の進路予定を把握する。男子では、「四大・浪人」が3割近くと最も多く、ついで「専各進学」が2割を超えている。一方女子は、「正社員内定」「専各進学」が2割を超えているが、「フリーター」と回答した者も約2割と多い。フリーターについては、女子は17.7%で、男子9.9%の約2倍である。さらに本調査では、調査時点で就職または進学を希望してはいるが、まだ就職内定をもらっていない者や進学先の決まっていない者（四大希望者を除く）をフリーター予備軍と位置付け、「準フリーター」とカテゴライズした。それによると「準フリーター」は、女子11.9%、男子15.2%となった。準フリーターは、今後進路未定のままで卒業する可能性が高いため、本稿では「フリーター」と「準フリーター」を合わせて「高卒無業者」とし、以下の分析を行っていく。

3-2. 男女の卒業後の進路予定と高3春の進路志望の関係

高3春の時点の進路志望がどのぐらい実現しているかを見ると、男子では「就職」志望と「専各」志望で約6割がそれぞれ志望を実現させた。また「四大進学」希望者も浪人を含めた約7割が自分の進路希望を達成している。一方、無業者となった割合を見ると、フリーターになった者は当初から「フリーター」志望者の4割強で最も多くでており、「その他」から3割でている。また「就職」志望や「専各」志望からは、フリーターよりもむしろ準フリーターになる割合が高くなっている。

女子では、「就職」志望と「四大」志望でそれぞれ約6割が当初の志望を達成し、「専各」志望と「短大」志望は約5割となっている。一方、無業者となった割合を見ると、フリーターになったものは「フリーター」志望者が約5割強と最も高く、「その他」「不考」から3割、「就職」からも1割強でている。そして、準フリーターよりはフリーターになる割合が高いのが特徴的である。

3-3. フリーターを意識する時期の差

結果的に無業者になるとはいえ、春の時点では生徒たちはいろいろな希望を持っていた。しかし、「フリーターになるだろう」「フリーターになりたい」など1年の間で次第にフリーターを1つの進路として意識していくようになる。

無業者となる者たちの中で、自分の進路希望を「フリーター」と回答した時期を見ると、その時期は男子よりも女子に早く表れ、またその割合も高い。春に「就職」希望だった女子は、夏で約3割、秋には半数がフリーターを考えるようになっていく。また「専各」希望者は夏で約1割強、秋に3割であり、「不考」では秋に4割が「フリーター」と答えていた。男子では、「専各」希望者の約3割が秋に「フリーター」を選ぶようになるものの、「就職」希望から「フリーター」に変更するものは秋の時点でも3割に満たない。男子は最後まで「フリーター」という進路を回避しようとしていたと考えられる。女子は早期に「フリーター」を選択しそのまま無業者となっていたことがわかる。

さて高3春から「フリーター」志望だった者は、年間を通して男女とも非常に高い割合で「フリーター」志望を維持している。1年間を通じてフリーターを希望し続けていた「確信フリーター」は、女子では女子無業者全体の14.8%を占めているのに対して、男子では7.0%と女子の半分に過ぎなかった。このことから、女子は男子よりもフリーターを1つの進路として早くから認識し、それを維持していく傾向が強いことが明らかになった。また早期からの「フリーター」志望者は、「先生に相談をした」者が2割程度いるが、「求人票を見る」「進学模試を受ける」などの進路活動をまったく行っていなかった。確信フリーターたちは、後から無業者になってきた者とは明らかに異なる状況から生み出されていると考えられる。このような無業者の発生プロセスに、男女でどのような違いがあるかについて、当日詳しいデータを配布する。

参考文献

- 荻谷剛彦ほか 1997「進路未決定の構造」『東京大学教育学部研究紀要』37
小杉礼子 2001「増加する若年非正規雇用者の実態とその問題点」『日本労働研究雑誌』No.490
文部科学省『平成13年度学校基本調査速報版』
耳塚寛明ほか 2000『高卒無業者の教育社会学的研究』
中西祐子 1993「ジェンダートラック 性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察」『教育社会学研究』53
日本労働研究機構 2000『進路決定をめぐる高校生の意識と行動』No.138
粒来香 1997「高卒無業者の研究」『教育社会学研究』61